

三つやの光



林化経板 画

本願の巻



御遺文

彌陀の本願

盡十方無礙光の中に在ることを信ずる吾親愛なる教友にまで申す。

人々皆其本源身體精神も共に法身如来藏より稟けたり之を佛性と云ふ。人々皆心性は彌陀の法身を根底にしなから肉體と共に心も主我の執着と罪惡の皮殻とを被ること譬へば鑽石の中に金性の有るが如くなり。

人々佛性を具備すると共に罪惡も必然的に具有したり。此の罪惡の皮を除き去りて彌陀の法身より稟けたる自己の眞性を顯現す

ることは是自己の力の及ばざる處なり。

二

いかにしてか元來賦與せられたる佛性を發顯することを得るとならば、彌陀の聖旨なる本願を仰いで信じ彼の恩寵に依りて解脱し靈化する外他に道有るなし。

彌陀の本願と云ふ即ち彌陀の意志なり。あなたの聖旨とは法界に満ち渡りて常に衆生の信仰心に感應して解脱し靈化せしむる處の勢力なり。あなたの聖旨は處として在らざるなく活動せざる處なきも信仰なき人々は空吹く風とまでも思はでむなく日を明し暮して冥きより冥きに入るものにてぞある。讚に彌陀の身心は遍法界。映に現衆生心想中。是故勸汝常觀察と。言ふ心はあなたの眞身と智慧の心は形こそなければ何れの處にも實在していまさぬ處こそなければ遍なく満ち渡る處の眞身なれば人々の心想の中に映現するのであるけれ共衆生自ら信仰の水すまされば之を知らずして居るのである。能くく深く心を留め神を凝して觀るときはあなたの眞身の中にもとより住める我身にしてあなたの智慧と慈悲とに包れたる我心なることは確かに意識せらるゝのである。如何に心を用て阿彌陀如來の身心の中なる我身なることを諦らかに意識せらるゝのであらうと問はゞ、聖の本願の文に

至心 信樂 欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺と云ふ上の三句を安心の三心と云ひ次の乃至十念を起行の念佛と云ふの

三

である。信者の安心起行にして最も大事のことである。

四

至心とは導師は眞實心と釋し、眞實心はもと佛性として自己の根底に潜みて居るけれ共我てふ迷に覆はれて人は虚假雜毒の非眞理なる心となれり。今彌陀の聖名に依りて我の迷なる事を覺りたる時眞實心と引換へて給る。あなたの聖旨は純粹なる眞理のみなれば我を捨て聖旨に隨ふ時眞實心は現はれるのである。

虚假雜毒の心にて自分可と思ふはあなたの聖旨を信じ得ざる故である。あなたの聖旨を得れば我てふ迷の雲はれて眞實の心顯るゝのである。

我執より起る心は虚假非眞理にて聖旨より顯るゝは眞實心なり

あなたは眞理なり非眞理はあなたの反對なるものなり。次に信樂とは信とは深くあなたの聖旨を信仰して疑はず。樂とは深く信順して背かざる斗りでなく信樂と云ふは深く聖を愛樂する心なり。一切の萬物の中に於て最も深くあなたを愛するなり。我身よりも命よりも凡ての者よりも聖を愛するなり。聖を愛するは自己の眞心を愛するので在り。聖を愛するが故にたとへ肉體の生命は失ふとも聖を愛する時は此の精神を聖は眞生命の中に我を愛して攝取し給ふて無限の光と壽とに同化し給ふと吾人は信じます。人在りて汝若し阿彌陀佛を信ずる事を捨てざれば汝の生命を失ふべしと云はゞ余は喜んで生命を失ふも信仰を捨つるに忍びず

五

其故は眞生命と肉の生命とは換る事能はざればなり。誰か一の土塊と無價の金剛石を換るものあらん哉。

又一切の萬物は盡く彼の佛の有なり。故に彼を愛し彼に攝せらるれば萬物は自己の所有となるなり。又我は全體を愛する故にあなたを愛す。凡て萬物は一としてアナタの一分ならざるはなし、全體は唯獨り絶對なる阿彌陀のみ。故に萬物にこえて獨りあなたを信じ愛樂するなり。

欲生とは即ち欲望なり。何を欲望するか即ち阿彌陀佛國なり。阿彌陀佛國とは一切萬物に超越せる眞理なり。即ち至眞と至善と至美となり。眞善美の靈界最高圓滿の處を神の國又は涅槃界或は淨土といふ。我等の欲望此處にあり。即ち眞佛の世つきたらん事を望むなり。凡べての物は朽ち壞する事あるも眞理の靈界は不變不壞なり。

眞理の靈界は不變不壞の故に無量壽國といふ。圓滿至善の故に報土と云ひ、最靈福の故に極樂と云ひ、最清淨至善の故に淨土と云ふ。

終に朽ち果つべきものは最終の目的とするに足らず。非眞理は眞人の欲望する處にあらず。我等の欲望は彌陀の世つきたらんこととなり。これ無上の位置に到達して無窮に神の働きを以て所有萬類を救濟せんが爲にして幸福主義の欲望を充たさんが爲に彼の國

六

を望むにあらず。

彼國に生れんと欲するも此の生命終つて始めて生ずる者に非ず。此肉體を轉ぜずして、唯天然の意志を轉じて、彌陀の眞生命に入り彌陀大我の中の自己にして彌陀を離れたる個人なるに非ざる事を知り、此身は彌陀の一切處に周遍せる性能を實現せんが爲の身なる事を意識して、彌陀の眞意實現として行動せば足るのみ。眞實彌陀の眞我の中の我として彌陀の生命の中の生命たるを識り、之に依つて行動せば此精神此儘無量壽の分身なり。此命を捨て始めて無量壽國に入るを待たず。

彌陀は此目的の爲に、我等に法身より此身を分出して人間界に現出するので、眞に此理を信する時は此身も心も本より法身より分出したので、而してまた報身の光りと壽とに歸命融合して始めて眞理が現はれて來るのである。左ればとて此命終りて眞實に淨土なきに非ず。彌陀の實在は眞實にして此世界の假りのものなる如くには非ず。不變不壞にして常住なり。此身の果には實在の眞實妙界に歸入するので、いまは精神が淨土に住み遊ぶのであると信すべし。

斷へずあなたの聖旨の實現んやうに聖名を崇めて祈り奉らん事を。

至心信樂欲生我國

八

七

九

眞理と愛と望との三徳なり。此眞望愛の三徳は如來の勅命として若し之を具へねばならぬものなれば能く願ひ見て眞實心なるや彌陀を信愛するや靈界の欲望いかばかり深きやを顧みよ。是を安心と云ふて如來の恩寵に對する信仰心なれば是非共具へざる可らざる必要なり。

乃至十念とは

眞心の開發なり實行なり。感情 意志 平和安樂歡喜 實現よきはたらき

眞と愛と望との意志によりて一心にあなたの聖旨の自己の心に實現せん事と日夜行住坐臥に祈り暮らして絶へざれば、聖旨の實現として内容に顯現して或は光明と現じ或は慈悲の御心とあらはれ、漸々に進み行けば彌陀の中の自己なりと定まり諦らかに識られてよりは、内面に顯現する斗りに止まらず、口には語となりて現れ眞實語愛語となり、身の行爲に現れては道德の行爲として菩薩の行となり來るのである。

十念とは阿彌陀佛の聖徳を表彰する聖名を稱へ、聖名に依りてあなたの聖旨をうけ聖旨が内心に現はれては佛智見開發となり心情には融合安立となり意志には實行となりて三業(身と口と意)佛の如きの行爲に現はれるのである。之を略して乃至十念の起行門と云ふ。

聖旨を領して信心まことに熟る時は我もなく彼もなく形質は暫

く別々なれ共内心は同じく彌陀の一味の海水なれば之を諸上善人とも清淨大海衆とも申す事なり願くば聖旨の實現せん事を祈り奉らんことを。

起信論

筆記 (3)

是より起信論の主義は如何によつて寤めるかといふ事を明す。宗趣を明す

所詮宗趣

本論の崇ぶ所を宗と曰ひ、宗の歸する處を趣と云ふ。主義と目的といふ如し。

宗に眞如三昧
念佛三昧

宗の定義は客體と主體との調和にあり。論に就いて云へば眞如の理と自分の心と調和するにあり。他教の例を云へば

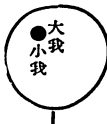
儻伽教の如きは、身口意相應して大日如來を念ふから、大日如來の方からも加へ、三密加持を宗とす。

法華は一大事因縁を宗とす。

法華 因は衆生佛性

縁は如來出世の教化―佛は我々に佛智見を開示悟入せしめ

給ふ



大我小我の調和にあり

自分の情神を何處迄も開き、自性を開發して宇宙を自己に納るゝは自力といふ。

大我に自己を投歸投入すれば他力といふ。

此の論に 智慧門―真如三昧―聖道門―理性―自己の智力に依つて判斷し 慈悲門―念佛三昧―淨土門―感性―如來より受くる恵

真如と契合するを所詮とす。論に其旨趣は皆離念歸於真如。

真如三昧とは法界一相。謂く諸佛法身與衆生身平等不二なることを觀す。此三昧に依らずして成佛すと云ふ理あることなし。

法界觀三昧に深く入れば、道も家も何にも差別の者なし。

即ち真如と一致する其が真如三昧なり。自性天真表るれば、法體

一にして彼我もなく、淨穢もなく、宗教心もなく尊む佛もなし、度すべき衆生もなし、絶對觀ばかりなり。

念佛三昧は慈悲によりて、怯弱の衆生を攝受す。

宗教に理性と感情とありて、元祖上人の如く如來に對して無智なり。無學なりと仰せらるゝ様にならねば、念佛三昧に入ることかな

はず。念佛三昧に入つて、初めて如來に對する恩恵を感ずる。此兩方なくては完全な宗教にあらず。

宗教的性質を以て、大我との調和をうる。

客體如來の體、真如三昧

體 絶對心 真如又自性天真

相 大智慧光明 遍照法界 常樂我淨

三昧に入つて彼我一致すれば智慧光明が表る

用 報應二身

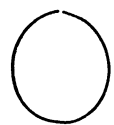
念佛三昧

用 報應

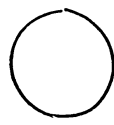


初如來が願力によりて 用より現はれたる相好より進んで如來の悲智を知り次に如來の體と契合す。

相



體



所 歸——歸命信賴する處の本尊。

所歸とは宇宙間に於て唯一獨尊なる一切に超絶せる處の神尊一切萬物を統御するところの靈格萬法の歸趣する處のこの唯一なる神尊に歸命するにあらざれば他に救靈の道あることなし。故に全心全幅を擧げて歸命信賴するものなり。

此唯一獨尊なる神格をアマダ如來と號し奉る。佛教に諸佛はさつこの名號甚だ多しといへどもみなミダ一佛の分身にして無量諸佛本源に歸する時は唯一體なり。彌陀と一切諸佛とはたとへば一月天に在りて影萬水に浮ぶが如く、百川萬江の浮べる月にありて異なるにあらず。

一切諸佛は彌陀一佛の應用の化現、彌陀の靈知と靈能とによりて一切衆生を救靈せんが爲めの分身なれば本ミダを離れたる諸佛にあらず。然れども本に歸すれば唯一の獨尊なれば全心を投じて歸命し全力を竭して仕えまつるべきはひとり彌陀如來のみ。

自己は無知無力たゞ罪惡のみを識る

吾人自己の心中に歸命信賴すべき本尊いまだ安置せざるむかしをしのお時は實に自ら恥し自から恐る、むかしの生れしまゝの我心情のあさましさよ。而にこそあらはれね、いかり憎、嫉、憍、貪などのすべての罪惡の要素として心裏に見えざるなし。すべての煩惱の種子内に伏在すればこそ機會にふれ縁に對して競ひ起り己を害したるをやめ罪をつくること極りなしさればこそ聖典には「煩惱の毒蛇睡りて汝の胸に在り黑蛇の室に在て眠るが如し」と吾人の胸中に眠伏せるもろくの毒蛇は外界の刺激にふるれば忽ちに覺醒して罪惡を顯動す。かゝる罪惡の巨魁を主我とは名づく。此の主我を主人公とし獨尊として我意、私慾若しは主觀に若しは客觀に於て惡として造らざるなし。此の罪惡の源なる主我を中心とし本尊として過しゆかばいつか迷ひの里を出て罪惡の源を斷つことを得べき。この主我を主人公として精神生活せるものを迷の凡夫とは云ふ。いまだ宗教の生命に入らざるものと名く。

歸命すべき獨尊を宗教意識に安置す

安 心

宗教的意識の確乎と決定した常恒不動の心理状態を安心と云ふ。安心は宗教意識の生命なり。故に未だ安心決定せざるものは宗教の生活に入らざるものと云ふべし。いましばらく安心してふものゝ意義を解説せんと欲す。乞ふ聞しめされよ。

安心の文字の解は安心とは安置心、安住心の二義あり。また古來の傳ふる處によれば安心とは所歸、所求、去行を確かに思ひ定むるを云ふ。

所歸とは安置心即ち自己の宗教意識に唯一獨尊なる歸命信賴すべきものを定めて自己の宗教意識を安置する義也。

所求とは自己の精神心情の安住する處を定め置くことなり。

去行とはささりゆく即ち人の生れつきの現在の心の安住する處は自己の迷とまた罪惡と苦惱とに依りて成立したるものなれば、この心理状態をさりとて清きいと安き靈國に更り行くべき修行のことなり。これを猶委しく説明せん。

さて吾人は曾て無明にさまよひ魔王の奴となりて空しく貧里に苦しめるも教主世尊の聖きみをしへによりて唯一の尊なる父の大なる靈能と大なる慈愛とを聞きしより、いまはむかしの非をさとり悔あらためて慈父に歸することを得たり。能く阿彌陀如來の眞理を知るときは宇宙は全體如來の中にあり。

如來は宇宙の最勝者なり。如來は宇宙の統攝者なり。如來は宇宙の無上權威者なり。如來は宇宙萬法の一大原則の基礎なり。如來は一切を救濟する大力量なり。

吾人は無知なり無力なり。從來自からの力にて活きるものと謂ひ來りしはその實然らず。宇宙の全體なる如來に活かされしなり。我等は曾て自から知ありと謂へり。その實は宇宙の全智なる如來より與られし外に我智あることなし。ことに我等の智はわづかなる身によりてかすかにほたる火だにあらざりしなり。我らは如來を離れては此身も生命も精神もすべてなきものなり。

如來は我身と生命と精神とを我に賦與し給ふことは何の爲ぞや。我に永恒の生命と無上の靈智に入らしめんが爲めなりと聞けり。いかにして永劫の生命と無限の光りに入ることをうべき。ぞこれ己を空ふし我をすて、永恒のいのちなる無限の光なる如來に歸命信賴するなり。我全心を盡して如來の眞我の中に投歸没入するなり。

我從來の主我中心の生命を亡ふして如來の中に生れ更るなり。如來の中に生れ更りし時には從來の我にあらざるなり。

如來の中に歸命し依屬せる我は永恒の生命なり。無量壽なり。無量光なり。

如來の報應身としての本尊

如來は光明普ねく十方世界を照して衆生の念する心を攝取し給ふ。

如來は我等のいける本尊なり。いま此身が太陽の力によりていける如く衆生心變は如來の靈能によりて靈活せるなり。如來は我等がいける本尊として常に離るることなきなり。我むかしは未だ曾て知らざりき如來の大慈悲は常に衆生を攝取し給ふことをまた如來の光明はとこしなへに衆生を照し給ふことを。

いまは諦かに信知す。如來の光明は夜も晝もとこしなへに衆生を照し給ふことを

如來の恩寵はいつも衆生心をいつくしみ給ふことを。衆生聖名を稱ふることは如來は聞き給へり。如來を敬禮することも如來は觀給ふ。衆生念じ奉ることを如來は知りたまへり。

吾人むかし曾て阿彌陀經をよみ奉りて阿彌陀佛現にましまして説法し給ふといふことは、衆生らが死してかの國に生れて後に妙法を聞くものなりとおもひき。いまはおもふ。否然からざるなりと。今吾人に對して現に在して説法し給ふなり。

眞佛甚深微妙の聲は肉耳を以て聞くべからず。但心靈の耳を以て初めて無聲の聲を聞く事をうべし。

如來は常恒に法を説きたまへり。我が信心かたむけるとき如來の眞音妙にひどけるを聞く。我悲しむとき如來は大慈悲を以て慰藉し給へり。我いかるるとき如來は愛語をもて我をなだめ給ふ。

吾らがすべての惱にも如來の慈顔をおもひ奉らば忽ちに歡喜を感じいかなる逆境のなかにも吾に平和と安穩とを與え給ふ。

吾本尊はいづれの處に於いても離るることなし。行住座臥にへだつことなし。吾必靈界に如來は安置し給ふ。

しかれども吾はまた世のくさくさの爲に如來の照鑑し給ふことを忘るることなき能はず。かの聖き名を稱ふるとき如來は吾が心に映現し給ふ故に常にいける本尊をここに安置すべきなり。吾の身心は如來の靈應を安置し奉るごころの宮なり。

吾ら肉體をもてるほどは一重の障をへだて、如來を觀見し上るなり。心眼にはさりなきもいまだ佛眼をえざるときはまだ一分のさわりなきこと能はざるなり。

若しこの穢身をさりて佛眼開けし時眞佛如來を如實に知見することをうるなり。

ごころにつねに本尊を安置して

吾は曾て謂ひたりき。ごころに於て命終り瞑目して後初めて涅槃界に安住することをうるものならんと。

否なり。如來の眞境は心靈界なり。俗に所謂冥途と云ふ如きものにあらざるなり。

此を去りて彼處に發見すべきものにあらず。吾人は生れつきの我の所感をして、正しく如來の中に投歸没入するとき如來の大神龍の融合せるとき、從來の主我の安住する心情を超えて小我中心の生命を捨てて如來の中に生れ更りしとき已に我信心はこのまゝ如來の靈界に轉生したるなり。これを有余涅槃と云ふ。即ちこの有余依の肉身はかわらざれども神は淨土に栖みあそぶころなり。このかたちを有しながら理想の極樂に安住するなり。

このかたちを實物と認むればこそ生死の怖れあり。かたちと迷の我てふころをはなれて如來の中なる真我を我と信認するときは本來は無量壽ならずや。

肉眼に七重寶樹や八功德池見えざればさて是極樂にあらずと云ふことを休めよ。吾人自己のはからひをすて、如來を信念し清淨莊嚴の觀に入るときは七寶の靈國は吾人理想の前に彷彿たり吾人は今は無量光明土に逍遙としてあそべり。

吾人は又百味の飲食この肉のために味ふことあたはざるが故に心靈は極樂に安住せるものならずとはおもはざるなり。我ら我をすて、如來の恩寵を觀する時法喜禪悅の妙味に極りなく味ふ事を得ればなり。吾人は口腹の味は飽くことあるも三味禪味は微妙にしてあくことを知らざるを覺ゆるなり。

歸命信賴して之に一任しこの指導のもとに奉仕することを得ばこれを所歸の本尊を宗教意識に安置し奉つるとは爲す。

所 求 — 終局目的の所求によりて安住をうる

所歸の本尊を安置してこれによりて心靈の生活をうるを安心の一面とせば常住の不變の靈界を求めて心情の安住する處を所求の境とす。

何故に吾人は常住の安住處を求むべきやとならば吾人の天然の生活なる身心と現に依止する世界の規定とは決して永恒の安住をゆるさざるなり。現世界は畢竟の安心を吾に與へざるなり。

吾肉眼の見る處の世界は轉變極りなきなり。いま吾々の身は老病死苦免れざるなりこれを思惟する時は吾は不安の情に堪えざるなり。吾らは如何にして生死を超絶して

不生不滅の眞界に超生することをうべきぞ。我はこれを求めて止まざるなり。こゝに於て教主世尊の勅に隨うて不死の門は開けたり涅槃の城はあらはれたり。聖き御名により聖き旨によりて眞如の都にいたることを念佛三昧によりて蓮華藏界に入ることをうるなり。眞善美の靈界に安住することをうるなり。如來の眞境に常住することを得るなり。

吾人はすべての吾同胞にすゝめて止ざるなり。とかく從來の我によりてすむ處のころのすまむ處を轉じて如來の安樂土に安住せられんことをと。世の人々を見るにたとへ形骸には綺羅の美を纏うて金殿玉樓に榮花をはこるも神はつねに三惡道に流轉し即ち一念瞋恚のほむらをもやせば即ち心はならくの境界を現はしなかに墮するなり。貪欲こゝろを惱ますは何ぞそれ餓鬼にあらざらん。嫉憎愚痴高慢或は烈火胸をこがし蠻水こゝろを浸す日々三惡のなかに循環し念々六道のちまたにさまよふ。ア、憐むべし。傷むべし。何ぞかゝるあさましき心情をすて、如來清淨の處に安心を求めざる。

現に今此心一念彌陀にあれば一念の淨土一刻如來にあれば一刻の極樂。極樂遠からず今は此一念めぐらして如來のなかに安立する時即ちこれ無量光土なり昨日までの娑婆にすめる心機を一轉して淨土に超生する時は自己の心性一新し人格一變するが故に天地もまた一變し乾坤もこれ昨日のそれと異れり。萬物光輝を發し事々希香を生ず。

渴聞般若經思兼念食無生即斷飢。

ア、樂し、げに極樂のなかに安住する心情は。ア、歡ばし、極樂に逍遙して極りなき理想のほどは。

世の人々よ。何ぞよしなきこゝろを捨て、この如來のみむねのなかにすみかえぬぞよ。

吾人はこの有餘の依身のあらんかぎり神は如來の極樂蓮華藏界にすみあそびてこの依身を蟬の如くに脱する時は無餘涅槃と云ふて實在の極樂涅槃界に歸入するなり。

去 行

至心全幅を擧げて歸命信願する處の唯一の本尊を宗教意識に安置すべきこと、及び最終の求むる處なる眞善美の極樂に心情を安住すべきことをば已に明しぬ。吾人はいかに心を致しに修行せば従前の心情の安せし處より轉じてこの身は存しながら神は極樂に安住することを得べきぞ。これを去行とす。その法要を聞むと欲す。

去行につきては五種聖行等。即ち一心に専ら聖經をよみ、一心に専ら如來を禮し、一心に専ら如來及び清淨國土を冥想觀念し、一心に専ら如來の聖名を稱へて聖旨の現はれをいのり靈國に格らんことをいのり、一心に専ら如來の聖徳を讚美しまた供養する等、要する處は、専ら如來の恩寵と自己の信仰とによりて相互の關係を親密にし如來の聖寵吾人の信念に應應し、吾人の信心に如來の垂意交感し彼此交渉感應致一し我れ如來に入り如來我に入り、己が心を空うし如來の聖意によりて自己の心意にみらしめ、ついに吾が心を轉じて如來の聖寵によりてアナタの聖徳に靈化するにあり。

而ればいかゞせば吾人の心は解脱靈化することを得べきぞとならば、善導大師の曰く、一心に専ら彌陀の名號を念じ行住座臥に時節の久近を問はず念々に捨てざるものを之を正定の業と名づく破佛の願に順するが故に。

要する處は、口に聖名を稱ふるは意に聖寵を憶念せんが爲めなり。意常に如來を憶念する時は念々如來が捨難せざるなり。

行住座臥に常に如來を憶念し寤寐に之を念ふて念々常に捨てざる時は早晚に心眼即開することを。

心眼開く時は即佛を見る。佛を見るが故に我が心と如來の恩寵と交感し融合す。如來の聖靈を感じるが故に從來の主我脱却し如來の聖意に變化す。これより後は如來の無作の聖意と自己の心靈と致一するが故に、たとへば泉の湧出する如く如來の泉源より自己の心靈に聖徳流れ出づ。歡喜極りなくこれよりは如來我心眼の前に現在する故に我この身はこれ如來の宮なりと知る。

三二
心情は常に如來の光明界中に安住するが故に平和と歡喜と極りなし。常に如來に歸命するが故に如來は常に吾本尊として照鑑し給ふ。如來を念するが故に吾如來の中に安住して平和の生活を得るなり。

これよりは、この肉體はかはらねどころは菩薩聖衆の數に入り如來指導のもとに生活を勤せん。

昭和八年五月二十五日 印刷
昭和八年五月二十八日 發行 (誌代年壹圓)

編輯兼 山崎 辨 成
發行人 小石川區關口町六十五番地
印刷人 小林 七太郎
小石川區關口町六十五番地
印刷所 靜文社 印刷所
電話牛込五四一九番
東京市小石川區水道橋二丁目四十四番地

ミオヤのひかり社
振替口座東京六八五一番